

『資本論』の2つのストーリーと「資本関係の解体の物質的諸条件」について

『資本論』第1部『資本の生産過程論』では、二つのストーリーつまり課題「どのようにして資本が剰余価値を生産するか」の分析と課題「どのようにして資本関係そのものが生産されるか」の分析が展開されている。「どのようにして資本が剰余価値を生産するか」の分析は剰余価値論＝搾取論であり、最初の草稿の1857-58年草稿(『経済学批判要綱』)以来展開されているストーリーである。

これに対し「どのようにして資本関係そのものが生産されるか」の分析は1861-63年草稿(第2草稿)で初めて提起されたストーリーであり、1863-65年草稿(第3草稿)最終章「直接的生産過程の諸結果」によると、「以上は資本主義的観念に捉われたブルジョワ経済学者たちの見解とは本質的に異なる見解である。何故なら、彼らは、どのようにして資本関係の内部で生産が行われているかをみてはいるが、どのようにして資本関係そのものが生産され、同時にその中でその解体の物質的諸条件が生産され、したがって経済的発展の…必然的形態としての資本の歴史的根拠が取り去られるかをみていないからである。

これに反しわれわれは、どのようにして資本が生産するかだけでなく、どのようにして資本そのものが生産され、資本がどのようにして生産過程に入った時と本質的に変化したものとしてそこから出てくるかをもみてきた。一方で資本は生産様式の姿態を変化させるが、他方で生産様式のこの変化した姿態と物質的生産諸力の発展の特殊的な段階は資本自身の姿態形成の基礎と条件——前提である。」(MEGA II/4.1 s.129-130)

『資本論』とその草稿中にこの「資本関係の解体の物質的諸条件」という表現は10か所以上ある。本論文中で必要に応じて参照する。

「どのようにして資本が剰余価値を生産するか」の分析は剰余価値論＝搾取論によって労働者階級の階級闘争と社会革命を理論的に根拠づけている。ところがそれだけでなく、『資本論』は「どのようにして資本関係そのものが生産されるか」の分析を通じて「資本関係の解体の物質的諸条件」を分析し、社会革命の必然性を明らかにしようとしていた。とすれば、「資本関係解体の物質的諸条件」とはどのような経済事象を指し、どこに、どのように生成してくるのであろうか。マルクスは明示していないが、この「物質的諸条件」は『資本論』のどこで分析されているのであろうか。また、諸条件の充足されていない社会革命はどのように評価すべきなのか。本報告の課題はこの点にある。